

十全會雜誌

第三十四卷第九號(第二百八十五號)

昭和四年九月一日發行

原 著

上腿ニ於ケル intracutane Venenbüschelニ就テ

(昭和四年五月六日受附)

金澤醫科大學解剖學教室(岡本教授指導)

專攻生 村 上 正 雄

一九二五年 Josef Novak ハ女性上腿ニ於ケル皮膚靜脈叢ノ存在ヲ以テ今日迄衆人ノ注意ヲ喚起セザリシ第二次性特徵ナリトノ興味アル觀察事項ヲ報告セリ。次イデ翌年(一九二六年)ニ至リ J.S. Galant ハモスコウニ於テ Novak ノ此ノ報告ニ對シ深刻ナル反駁說ヲ樹テ、Novak ノ言フ intracutane Venenbüschel ハ畢竟フレンケ氏現象ト同様一ツノ鬱血現象ニ過ギズシテ、決シテ女性ニ於ケル第二次性特徵ナラズト強固ニ否定セリ。果シテ其ノ眞僞何レニ存スルヤ、未ダ詳ナラズト雖モ、恐ラクハ Galant ノ說ク如ク持續的鬱血ニ基ク血管擴張ニ因ル部分的現象ナラントハ、何人モ想像ヲ容易ナラシムル所説タラン。

Novak ノ言フ現象ガ果シテ女性ニ於ケル性特徵トシテ實事ニ認ム可キモノナリヤ?、余モ亦其ノ實證ヲ確メントシテ、健康婦人、非妊婦並ニ妊、産婦合計一六九人ニ就テ、精細ニ調査セリ。本調査ニ際シ、多大ノ便宜ヲ與ヘラレタ

ル金澤醫科大學產婦人科教室員並ニ日本赤十字社石川支部産院勤務ノ諸兄ノ御厚意ニ對シ、此處ニ滿腔ノ謝意ヲ表スルモノナリ。

余觀察ノ便宜上、之ヲ非妊婦ト妊婦トニ二大別シテ、其ノ上腿ニ於ケル皮膚靜脈發現ノ頻度並ニ其ノ發生部位ニ就テ、之ヲ其ノ臨床所見ト比較考察セリ。

一、非妊婦(未產婦及ビ經產婦ヲ含ム)上腿皮膚靜脈ニ就テ
非妊婦一〇四例中、之ヲ年齡別並ニ未產婦、經產婦ニ分割表示スルニ次ノ如シ。

第一表 15-19歳 (4例)

左 側				右 側			
0				1 (25%)			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	—
中	—	—	—	中	—	—	—
下	—	—	—	下	—	—	—
計	—	—	—	計	—	—	1

第二表 20-29歳 (52例)

左 側				右 側			
23 (44.2%)				23 (44.2%)			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	1
中	3	—	7	中	—	—	2
下	5	—	19	下	3	—	21
計	8	—	26	計	3	—	24

第三表 30-39歳 (26例)

左 側				右 側			
12 (45.8%)				13 (50%)			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	—
中	1	—	5	中	—	—	6
下	1	—	9	下	—	1	9
計	2	—	14	計	—	1	15

第四表 40-49歳 (9例)

左 側				右 側			
2 (22.2%)				5 (55.6%)			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	—
中	1	—	2	中	2	—	2
下	1	—	5	下	2	—	4
計	2	—	7	計	4	—	6

第五表 50-59歳 (11例)

左側				右側			
5 (45.5%)				6 (54.5%)			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	—
中	—	—	1	中	—	—	1
下	—	—	4	下	—	—	4
計	—	—	5	計	—	—	5
			4				3

第六表 60-69歳 (1例)

左側				右側			
1				1			
側部	前	後	内	側部	前	後	内
上	—	—	—	上	—	—	—
中	—	—	—	中	—	—	—
下	—	—	1	下	—	—	1
計	—	—	1	計	—	—	1

第七表

總計 104例		未産婦 35例		經産婦 65例	
左側	右側	左側	右側	左側	右側
48 (46.2%)	48 (46.2%)	16 (45.7%)	17 (48.6%)	31 (47.7%)	32 (49.3%)

上表ニ於テ見ル如ク、何レモ其ノ被檢例ノ約半數未滿ニ於テ、略左右同様ノ頻度ニ皮膚靜脈ノ擴張ヲ認メリ。然レ共其ノ發現極メテ微弱ナルモノ多ク、僅ニ一乃至二種長ノ線狀ノモノ、乃至ハ僅ニ分岐狀ヲ呈スルモノ多クシテ、所謂網狀ヲ呈スル定型的ナルモノ極メテ少シ。斯ノ如キ微弱ナル皮膚靜脈ノ發現ハ又ヨク吾人ハ男性ノ上腿皮膚ニ於テモ屢々認メ得ル所ナリ。

Novakハ未ダ分娩ヲ經過セザル若年ノ婦人ニ於テハ、皮膚靜脈ハ殆ンド之ヲ認メザルカ、又ハ極メテ稀レニ認メ得ルコトアルモ、二十歳以上ノ經産婦ニ於テハ約八〇%ニ上腿皮膚靜脈ノ擴張ヲ認メリト稱セリ。女醫Telenハ十五乃至二十歳ノ處女三九例ヲ檢セル結果、僅ニ二例(十六歳及ビ十七歳)ニ於テ其ノ上腿ニ皮膚靜脈ヲ認メリトイフ。余モ亦上表ニ示スガ如ク、十七歳及ビ十九歳ニ於ケル四例ノ未産婦ニ於テ、一例(十九歳ノ者ニ於テ)右上腿内側下部ニ當リ、僅ニ分岐狀ヲ呈セル皮膚靜脈ノ一乃至二個散在スルヲ認メシト雖モ、二十歳以上ノ未産婦ト經産婦トニ於ケル皮

膚靜脈發現ノ頻度ヲ比較スルニ、第七表ニ示スガ如ク兩者略同様ノ頻度ニ於テ之ヲ認ムル所ニシテ、Zovakノ言フ如ク特ニ經産婦ニ著明ナリト斷定シ得ズ。只皮膚靜脈擴張ノ程度乃至ハ其ノ網狀形成ノ度合ニ關シテハ、經産婦ハ未産婦ヨリ稍々著明ナルモノ比較的多シ。之レ既ニ經過セル妊娠ノ爲メ多少ノ度ニ於テ靜脈擴張ヲ來セル婦人ニ於テハ、其ノ妊娠性變化(特ニ鬱血現象)ノ遺殘現象ノ一ツトシテ、未産婦ヨリ、ヨク著明ニ認メ得ルニアラザルカ。

尙未婚婦或ハ未産婦ニ於テモ、其ノ皮膚靜脈ハ管ニ上腿皮膚ノミニ限局セズ、尙ヨク下腿外側面ニ於テモ散在性ニ之ヲ認メシモノアリ。上腿皮膚靜脈ノ發現ヲ、Fischerノ說ク如ク、發育ニ伴フ上腿皮膚緊張ノ變化ニ由リ、皮膚靜脈ノ皮下靜脈ニ開口セントスル部位ノ屈曲ニ基ク二次的變化トシテ皮膚靜脈ノ血流障礙ニ由リ其ノ擴張ヲ將來スルモノナラントスル說ヲ是認スルトナスモ、之ヲ以テ直チニZovakノ憶說ヲ肯定シ難シ。若シ軀幹發育(特ニ臀部)ニ伴フ皮膚緊張ノ變化ニ因ルモノナリトセバ、妊娠、分娩ノ有無ニ關セズ、發育略完成ニ近キ春季發動期以後ノ女性ニ於テハ、相當ノ頻度ニ上腿皮膚靜脈網ノ發現ヲ認メ得ベキ理ナリ。

更ニ其ノ發生部位ニ就テ之等ノ關係ヲ窺フニ、Zovakハ上腿ノ外側或ハ前側ニ於テ最モ屢々認メ而カモ其ノ上腿ノ中部又ハ下方三分ノ一ノ部位ニ於テ甚シク、上腿内側又ハ屈曲側ニ之ヲ認ムルコト極メテ稀ナリト稱セリ。余非妊婦ニ於テ之ヲ檢スルニ、上表ニ示スガ如ク、其ノ過半数ハ上腿内側下方三分ノ一ノ部位ニ微弱ナル皮膚靜脈ヲ認ムル場合多ク且ツ左右略同頻度ニ於テ之ヲ認メリ。

斯ク非妊婦ニ就テ觀察シ來ルニ、Zovakノ言フ如ク女性特有ノ變化ナリト思ハルル何物ヲモ檢索シ得ズ。果シテ然ラバ、其ノ發生原因ヲ何ニ求ム可キカ、余モ亦之ヲGalantト同様當該部位ニ於ケル鬱血ノ一症狀トシテ説明スルノ至當ナルヲ信ジ、敢テ女性特有ナルモノニアラズシテ只女性ハ下肢鬱血ヲ將來スル機會ノ男性ニ比シ多キニ因ルナラントス。

二、妊、産婦上腿ニ於ケル皮膚靜脈ニ就テ

妊、産婦合計六五例ヲ前記同様、年齢別並ニ初妊婦ト經産妊婦トニ分チ表示スレバ次ノ如シ。

第 八 表 20-29歳 (54例)

左 側					右 側				
23 (42.6%)					30 (55.6%)				
側 部	前	後	内	外	側 部	前	後	内	外
上	1	—	1	1	上	—	—	—	1
中	4	—	3	7	中	1	—	2	8
下	3	—	10	17	下	—	—	7	26
計	8	—	14	25	計	1	—	9	35

第 九 表 30-39歳 (9例)

左 側					右 側				
8 (88.9%)					7 (77.8%)				
側 部	前	後	内	外	側 部	前	後	内	外
上	—	—	—	—	上	—	—	—	—
中	—	—	1	3	中	—	—	—	4
下	—	—	4	5	下	—	—	3	7
計	—	—	5	8	計	—	—	3	11

第 十 表 40-49歳 (2例)

左 側					右 側				
2					2				
側 部	前	後	内	外	側 部	前	後	内	外
上	—	—	—	—	上	—	—	—	—
中	1	—	1	1	中	—	—	—	—
下	1	—	1	1	下	—	—	—	2
計	2	—	2	2	計	—	—	—	2

第 十 一 表

總 計 65 例	
左 側	右 側
33 (50.8%)	39 (60%)

第 十 二 表

年 齡	初 妊 婦			經 産 妊 婦		
	例	左 側	右 側	例	左 側	右 側
20-29	30	12 (40%)	15 (50%)	24	11 (45.8%)	15 (58.3%)
30-39	1	1	1	8	7 (87.5%)	6 (75%)

妊、産婦ニ在リテハ、上腿皮膚靜脈發現ノ頻度、非妊婦ニ比シ僅ニ大ニシテ、其ノ半數強ニ於テ之ヲ認ム。而カモ非妊婦ニ比シ皮膚靜脈擴張ノ度、強度ナルノミナラズ、網狀形成又明ニシテ、定型的ナルモノ比較的多シ。然レ共尙ホ Novakノ報告ニ於ケルガ如ク、二十歳以降ノ經産婦ノ八〇%ニ於テ、皮膚靜脈ヲ認ムトイフ頻度ニ遠ク及バズ。

其ノ發生部位ニ就テ檢スルニ、非妊婦ニ於テハ上腿内側下部ニ最も多ク發見シ得ルニ反シ、妊、産婦ニ在リテハ大腿外側下方ノ部位ニ認ムル者最多ク、且ツ右側上腿ニ於テ其ノ發現稍々夥シ。尙其ノ強度ニ皮膚靜脈ノ擴張ヲ來セル妊、産婦ノ或者ニ於テハ、管ニ上腿ノミニ限局セズ下肢全般ニ渡リテ之ヲ認ムルモノアリ。或ハ上腿ニ輕度ニシテ却テ下腿外側ニ於テ、強度ノ皮膚靜脈ノ擴張ヲ認ムル者アリ。其他腰部、下側腹部乃至ハ上膊等ニ可成著明ニ之ヲ認メシ症例アリ。

余更ニ初妊婦ト既ニ分娩ヲ經過セシコトノアル經産妊婦トノ間ニ於テ、上腿皮膚靜脈發現上其ノ頻度ニ如何ナル差違ノ存スルカラ調査セシニ、第十二表ニ示スガ如ク二十乃至二十九歳ニ於ケル經産妊婦ニ於テハ、皮膚靜脈擴張ヲ認ムル頻度ノ稍々上昇ヲ認ムルモ、尙其ノ同年齡ニ於ケル非妊婦トノ差隔著シカラザルニ、三十乃至三十九歳ノ經産妊婦ニ於テハ、頓ニ其ノ頻度ノ上昇ヲ來セルヲ見ル。之レ分娩回数ヲ重ヌルニ從ヒ益々上腿皮膚靜脈網ノ發生増加ヲ意味スルモノニシテ、一般ニ經産妊婦ニ於テハ、皮膚靜脈擴張ノ度モ亦非妊婦ニ比シ著明ナルモノ多キヲ認ムルモ、之レ畢竟妊娠時ニ於ケル下肢血行障礙ニ由ル鬱血現象ニ、遠ク其ノ因ヲ發スルモノナラントス。

妊婦ニ於ケル上腿皮膚靜脈擴張ノ程度ト、妊娠靜脈瘤及ビ妊娠時浮腫トノ關係ヲ考察スルニ、Novakハ兩者間ニ何等相關關係皮ヲ認メズト稱セルモ、余ノ觀察ニ於テハ皮膚靜脈網著明ノモノニ於テハ又屢々下肢靜脈ノ怒潮又ハ浮腫ヲ證明セシ者多シ。之ニ由テ此レヲ考フルニ、余ハ上腿皮膚靜脈ノ擴張モ亦妊娠時浮腫乃至ハ靜脈瘤ノ成因ト同様、血液環流障礙ニ由ル持續的鬱血ガ、其ノ發現ヲ助長スル大ナル誘因ヲナスモノナリト信ズ。

以上ノ事實ヨリ之ヲ綜合スルニ、上腿ニ於ケル皮膚靜脈網ノ存在ヲ以テ、女性ノ一性特徴ナリト稱セルNovakノ憶說

ニ對シテハ、余モ亦、斷然之ヲ否定セントスル Galant ノ說ニ左袒スルモノナリ。Galant ハ言フ、既ニ再三分娩ヲ經過シ多少ノ度ニ於テ靜脈擴張ヲ來セル婦人ニ於テハ、其ノ上腿ニ於ケル皮膚靜脈網ハ、確ニ下肢ニ於ケル持續的鬱血ノ部分的現象ニ過ギズシテ、既ニ其レハ最モ輕度ナル病的現象ト看做ス可ク決シテ Novak ノ言フ如ク女性ニ於ケル第二次性徵ナラズト。

勿論皮膚靜脈ノ發生ハ、當該部位ニ於ケル血行障礙ノ結果タルヤ明ナルモ、而カモ其ノ因テ來ル原因ニ就テハ、尙之ヲ體質的方面ヨリモ觀察ス可キモノニシテ、單ニ鬱血現象ノ一症狀トシテ總テヲ解決セントスルハ早計ノ感アリ。余ハ只此處ニ Novak ノ云フ上腿皮膚靜脈網ノ存在ガ、女性ニ於ケル第二次性特徵トシテ、特性付ケラル可キモノニアラザルヲ檢索セシノミ。

欄筆ニ臨ミ、岡本教授ノ御校閲ヲ感謝ス。

LITERATUR

- 1) Novak, Josef. Intracutane Venenbüschel am Oberschenkel, ein bisher unbeachtetes weibliches Geschlechtsmerkmal. Zeitschr. f. Konstitution slehre, Bd. XI, 1925.
- 2) Galant, Johann Susmann. Das Fränkische Phänomen und der "intracutane Venenbüschel am Oberschenkel" Zeitschr. f. Konstitutionslehre, Bd. XIII, 1927.